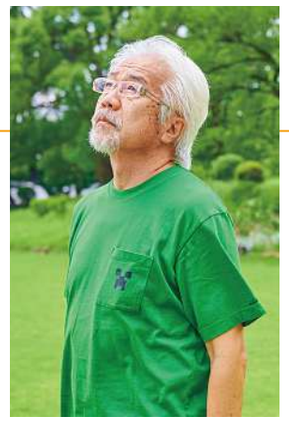
死者の日に出会う

詩人・明治大学大学院理工学研究科（総合芸術系）教授　管（すが）　啓次郎（けいじろう）



撮影：はぎひさこ

Essay　時の調べ

メキシコシティに着いたのは「死者の日」2日目の夜で、どくろをテーマにして化粧し仮装して楽しんだ人々も、すでにそれぞれ家路をたどる頃合いだった。みんなでお墓に行き死者とともに楽しく過ごす日だというが、故郷を離れた大都市の住民にとってはやや特別な、お祭り騒ぎのできる週末といったところか。都心を斜めに走るレフォルマ通りは幅広く、まるで公園のようだが、そのところどころに、どくろの顔をした貴婦人ラ・カトリーナの像が立っている。華やかなドレスを着て帽子をかぶり、扇をゆったりと構えた彼女は、いつからか「死者の日」というメキシコ最大の年間行事のシンボルになっているらしい。

誰が立てたのか身長数メートル、衣装もポーズも少しずつ異なったカトリーナさまがその通りには何体もいて、人間世界を優しく怖く見守っている。彼女と頭部だけのどくろが死者の日の主役。大小様々に形づくられ、彩色されて、街路から飲食店から、いたるところにあふれている。死者はなつかしく愛しいという気持ちはどの文化にもあるだろうが、これほどまでにどくろを「可愛いもの」「愛すべきもの」とみる社会的合意が全面的にあるのは、やはりメキシコだけではないか。ラ・カトリーナの前身はアステカ時代の死の女神ミクテカシワトル。地下に暮らす人間の亡骸（なきがら）の守り手でもある。

死者と生者をきっぱり分けてしまうのが現代社会だが、もともと人間の発想としては「死者も死者として生きている」ということを、どこかで信じたがっているのではないかと思う。それが願望であるのみならず事実でもあることを、社会全体として確認するのが「死者の日」で、メキシコにおけるこの生と死の隣接ぶりには圧倒される。そしてこの日を彩るもう一つの合意ともいうべきは花の遍在。おそらくマリゴールドの近縁種だろうが、オレンジがかった黄色の丸い花がいたるところにあって、特に祭壇は文字通りこの花で埋めつくされている。花の名はセンパスチル。その色は太陽を表し、太陽はいうまでもなく生命の源泉で、どくろを花に埋めることで生を祝福するのが「死者の日」なのだともいえるのかもしれない。

危険、暴力、死にまつわる話は、メキシコではいたるところにある。幸い僕は危ない目にあったことはないが、愛読してきた文学作品でいえば、ファン・ルルフォの『ペドロ・パラモ』やマルコム・ラウリーの『火山の下』などが提示する「死の近さ」の強烈なイメージは、メキシコにいる間、常に脳裏で点滅している。酩酊（めいてい）なのか、覚醒なのか、ともあれメキシコがわれわれの意識を通常とは違う状態に置き続けることは間違いないように思う。

死者の日の象徴でもあるラ・カトリーナ像

翌日、市内の広大なチャプルテペク公園に向けてレフォルマ通りを歩いていたら、全くの偶然でボラドーレス（飛ぶ人たち）の実演を見ることができた。何メートルの高さか、鉄塔の上から民族衣装を着た4人の男が逆さ吊りになり、旋回しながら次第に降りてくるのだ。1人は笛と太鼓も担当している。知識としては知ってはいたが、見るのは初めて。見上げつつ、空中を飛ぶ彼らに想像で同一化すると、めくるめく思いがする。これは儀式であり、自分の身を危険にさらす供儀（くぎ）だ。飛ぶ男たちは「小鳥」と呼ばれ、そこに潜むのは鳥に対する同一化でもあり、太陽への憧れでもあるのかもしれない。

いいものを見た、と心から思った。高原の青空を背景としたこの危険な儀式は、晴朗で、明るい。しかしそれもまた確実に死と隣り合わせだ。死と生を、同時に称揚している。この絶妙なバランスを、これから真剣に学んでいきたいと思った。

ボラドーレスの実演

略歴

1958年生まれ。2011年、紀行エッセー『斜線の旅』（インスクリプト）にて読売文学賞受賞。批評文集として『エレメンタル』（左右社、2023年）、詩集として『数と夕方』（左右社、2017年）ほか。サン＝テグジュペリ『星の王子さま』（KADOKAWA、2012年）の画期的新訳をはじめ、フランス語、スペイン語、英語からの訳書も多い